

平成 28 年度 第 1 回北九州市子ども読書活動推進会議

- 1 日 時 平成 28 年 4 月 25 日 (月) 14:00~16:00
- 2 場 所 小倉北区役所庁舎 5 階 503・504 会議室
- 3 出席者 [委員] 山元悦子委員 (会長) 他 12 名
[事務局] 渡邊教育次長 他 11 名

4 会議次第

- (1) 「新・北九州市子ども読書プラン」の周知について
- (2) 今後 5 年間の単年度目標値の設定
- (3) 子ども図書館の整備について

5 主な質疑応答

「新・北九州市子ども読書プラン」の周知について

事務局／本日の議事は 3 件です。

まず初めに、「新・北九州市子ども読書プラン」の周知について。昨年 8 月に、「北九州市子ども読書活動推進条例」に基づいてこの会議が開催されて以来、委員の皆様によくの活発な意見をいただいた。28 年の 2 月には、第 3 次の「北九州市子ども読書活動推進計画」としてこのプランを策定したところである。冊子と概要版のリーフレットも作っている。資料の (3) にまとめているように、これから周知徹底していきたい。まず、公立・私立にかかわらず、幼児から高校生まですべてのご家庭にこのリーフレットを届けたい。それから、施設関係にも、冊子を 1 冊とリーフレットを配布して、皆さんに周知徹底をまずは図りたい。15 万部を用意し、800 か所に配る予定にしている。広報関係については、もう既に終了したものもあるが、そこに挙げているように、いろいろな形で市民の皆様へ広く周知を図っていきたい。それから PR に努めたい。各種会合・学校はもちろんのこと、企業に出向き、ホームページにも掲載するなど、いろいろな形でこのプランの周知徹底を図りながら子どもたちの読書の推進に努めたい。なお、皆様方のそれぞれの立場で、ご協力いただけたらと思うので、「こういう形がある」とか「こういうものがほしい」とかいうご要望があれば、またいつでも私どもの方にお声をかけていただきたい。

次に、議題の 2、今後 5 年間の単年度の目標値の設定について。3 ページにこの評価についての目標値と評価の基本的な考え方を述べている。この考え方に基づき、単年ごとの目標を示しているのが資料の (4) である。今後、この目標値に向かってそれぞれ努力をしていくが、平成 28 年度の目標値については枠組みをしているので、今年、これを超えるように努力したい。なお、結果については、年度当初のこの会議で皆様方にお知らせをし、ご意見をいただきながら進めていきたい。

最後の 3 点目、「子ども図書館」の整備について。これは、プランの 29 ページと 30 ページに基本的な考え方を示している。「子ども図書館」は、現在の勝山分館と視聴覚センター及び中央図書館の一部を改修して整備を行う予定である。配布資料の (5) にその図面が載っているが、整備可能面積としては、勝山分館と視聴覚センター及び旧放送大学サテライトの約 2,200 ㎡が対象となっている。今後、皆様のご意見を伺いながら、どのエリアを「子ども図書館」としてどう整備していくか決めていきたい。「子ども図書館」が担う機能としては、既にプランの中で

6つの大きな柱を示しているので、この機能をどのように効率的・効果的に配置していくかということが今後の検討内容の中心になっていくと考えている。設計については、中央図書館と同じように、著名な建築家の磯崎新氏の事務所をお願いをする予定である。基本計画の検討にあたり、約6か月ほどの調査期間が必要と考えている。途中、節目節目で、委員の皆様のご意見をお伺いしながら、可能な限り、意見を反映したい。次回の会議では、図書館の機能配置を示すゾーニング案を確認してもらうことを考えている。平成30年の秋に開館するという方向に向けて、資料の(6)に行程表を示しているが、これに沿い基本の計画修正等を行いながら、より良い図書館の建設にしたいと思っている。いずれにしても、今後は整備内容を具体的に検討していくことになるので、皆様の意見をぜひお聞かせいただければと思っている。

会 長／今日は、大きく3つのことについて意見交換をする。

1つ目は、「子ども読書プラン」、これを広めPRするための様々なアイデアを寄せること。それから2つ目、この5年間の目標値のうちの今年度の目標値を上げるためにどのようなことが考えられるか、という点。それから3つ目が、「子ども図書館」に持たせる機能について、どのような機能を具体的に持たせると良いかというようなことでアイデアをいただきたい。以上、3つについて進める。まず1つ目、「子ども読書プラン」の周知について意見を伺いたい。

委 員／今年度、福岡県の学校図書館協議会の持ち回りの発表会がある。9月25日に、実際に小・中・高、それから行政を含めた分科会があり、全体の講演ということで行われる。北九州市がこれから取り組もうとしていること、そして、今行っていることをアピールできる機会になるのではないかと考えている。

委 員／子どものいるすべての家庭にパンフレットが配布されるというのは素晴らしい。しかし、実際に見せてもらうと、字が大変多い。家庭にこのままただ配っても読んでももらえないのではないかと思いますので、説明をしながら配るというような、そういう取組みが必要ではないか。小学校や中学校等で保護者たちが懇談会等にいられた時等に説明等をしないと、せっかく配っても読んでももらえないのではないか。手渡し方にも工夫が必要である。

事務局／今、ご意見があったとおりが、配布先が大変多いため、直接子どもたちやご家庭に説明ということは難しい。例えば、校長先生や担当の先生等に説明するということは十分考えている。また、家庭教育学級等で扱っていただく等の周知徹底を考えている。

委 員／家庭教育学級での取組みを、生涯学習推進コーディネーターとして今年度もやっていこうと思っている。先ほど委員が述べたように、この冊子を各家庭に子どもが持ち帰ったとしても、保護者の皆さんが目をしっかり通されることはほとんどないと思う。まして、この内容を「子どもたちのための、子どもたちのものなんだよ」ということを噛み砕いて教えてあげられる機会というのはかなり少ないと思う。やはり学校図書館が常時開館していることと、それに携わるブックヘルパーが図書館に少なくとも週に数回は常駐していることが大切で、そのブックヘルパーの活動の中での働きかけが必要ではないか。家庭教育学級の中での保護者に対するアプローチは大事だと考えている。家庭教育学級で「子ども読書プラン」という形で取り上げるのではなく、例えば、「まず親が地域の誇り・郷土の作家の作品を読みましょう」等の1つのテーマの中で丁寧に説明していかないといけないと思っている。

会 長／保護者に対するアプローチをやる方というのは、家庭教育学級にはいらっしゃるのか。体制は充実しているか。

委 員／テーマによるが、例えば、校長先生のお話が子どもの読書に関することであったり、図書室にいる学校司書の先生、外部の先生がそういうお話をしてくださる。テーマごとに中央図書館には本に関するボランティアの方がたくさんいらっしゃるので、読書という大きいテーマの中で取り上げて、丁寧にこの読書プランを伝える場を作ってもらえたらと思っている。

委 員／幼稚園連盟は、北九州は4ブロックに分かれて園長会が行われているので、まず、その各ブロックの園長先生たちの会議の時に市から説明してもらい、持ち帰って各園で保護者にどのように伝えていくかということを考えて手渡しをしていくというのは、1つの案である。

幼稚園連盟では、10月にPTAの大きな講演会があるので、そういう機会を利用してはどうか。このプランのパンフレットが出た後でも、説明を重ねて浸透させていくということも大切だと思う。

事務局／大変大切なことなので、日程を見て検討したい。

委 員／保育園の方は、5月26日に公立も私立も含めて保育園の園長先生方の全体会があるので、その時に説明してもらいたい。また、園長先生方の会議で「保育士会」という総会が5月20日にある。現場の先生たちへの直接的な説明の場になるので検討してもらいたい。6月9日に「リーダー研修」を八幡ロイヤルホテルで計画しているが、これは現場の園長先生・主任先生のリーダーたちの研修会なので、そこでまた説明してはどうか。まず園長先生に説明し、次に現場の先生方に説明をすると、より家庭教育学級の計画にも入れやすくなるし、このプランが浸透すると思う。

委 員／PTA協議会として、広報紙の掲載等やホームページ等のリンク等でプランを紹介することができる。他に会長等の機関を集めて行う研修会等で、読書活動的な事を入れていこうという事になっている。地域差があるので、一律的な対応はできないが、教育委員会とPTA協議会の方で詰めていけたら、様々な形で啓発等ができるのではないか。実際は教育委員会がリーフレットを学校に配り、先生方が生徒に配るという形になると思うが、教育委員会の方から「PTAでこんなことをしてほしい」という事を提案してもらって、詰めた議論ができたと思う。

事務局／皆様方のお陰で大変いいプランができたと思っているが、大事なことは、中に書いてあるプランをどう本当に着実にみんながそれぞれの立場で実施していくかということである。「できたから配って終わり」とは全く思っていない。また、「1回説明したから終わり」とも思っていない。5年かけてじっくり、そして一生懸命やる必要があると思っている。今、意見を出して頂き、すぐに全部に取り組むということはなかなか難しいかもしれないが、どんな形で進めて行けば良いかということは相談しながら、効果的な方法で子どもたちに届くようにやっていきたい。まずは配りたい。なぜならば、読まない人がたくさんいるかもしれないが、まずは配って、「え、こんなことしてるのね」、「聞いてみたいな」という気持ちが湧き上がるのを待ちたい。最初はただ配るだけとひよっとしたら思われるかもしれないが、まずは全家庭に配らせていただきたい。その後、地道に、そして確実に取組みを進めていきたい。

会 長／配布だけではなくて、「この施策の中のこれならできる」という実行アイデアのようなものが湧き、意欲を持っていただいて実現するというのが元々大事なこと

である。PTAで、この施策に乗って行ってできること、「こんな風にできる」ということはあるか。

委員／読書活動の推進についてはいろいろ言い続けている。ただ、形がはっきりしていなかったのので、具体的なアクションは起こしていない。区レベルでも研修会は数多くあるので、その時にこのプランを説明できる方が来て、研修の場としてこのプランを扱うことは可能である。過去に実施したことのある読書フォーラム等のイベントと一緒に活動ができると思う。

委員／企業や講演会で話をしに行くときに、なぜリーフレットを配るのかということが、リーフレットを見るだけでは分からない。わからないままこれをもらっても、普段は見ないのでないか。市で「子ども読書プラン」を進めたいのであれば、なぜ読書が必要だと市が考えているのかというのがダイレクトに伝わる文書が1枚あると良いのではないか。市が読書を進めたい、学校の先生方も「読書はすごく良いこと」と言うし、最近ではACジャパンなどのCMもやっているが、「なぜ」といわれたときに答えられなかった。市が進めるにあたって、なぜこのプランを進めるのかというのがご家庭に届くような形になっていると良いのではないか。

会長／単発立ち上げのボランティアの方たちが個別に頑張っているのではなくて、大きな組織的な取り組みもあるのだという視野を持っていただく。そういった形で、どんどん私たち自身が広めてじわじわと声かけていくという方法は大変良い事である。

委員／説明をする行政の方は十分熟知されているので、上手に説明ができると思うが、ブックヘルパーさんやボランティアの方が配布するためには「これを渡すに当たって、最低限こういうことを話してほしい」という簡単な研修や講座のようなものはあった方がいのではないか。

委員／リーフレット約15万部配布とあるが、その内訳は学校関係が14万部ほどで、大部分を占めている。学校関係者が果たしてこの読書プランについてどれだけ周知できるか疑問が残る。主だった担当の方たちに説明をして、そこから校長会・教頭会等でこれを周知徹底していくようにして、それから学校長・教頭が、自校の園・小学校・中学校それぞれで広めていくという手だてが必要である。

委員／このパンフレット・リーフレットを周知する立場になるかもしれないボランティアの方たちについて、ブックヘルパーさんや中央図書館で読み聞かせボランティアバンクに登録している、実績のあるボランティアさんにもこれをお願いしようと決めて、研修を開くと良いのではないか。

委員／企業も対象として挙げたが、大企業の他に書店や、本に関係のある企業に協力をしてもらおうという手もあるのではないか。

事務局／書店はどうかというご意見について、細かいところまでどうやっていくかというところまでの計画は持っていないが、いろいろ意見を伺いながら検討したい。

委員／商工会議所の組織の中にある青年商工会議所で、それぞれボランティアで行っているところがあり、こういったところにも北九州市の施策としてアピールしてはどうか。

事務局／(2)に書いているが、広報紙等には載せてもらうようにしている。皆さんの先ほどからのご意見は、もっと実際に出向いて行って話をするというようなので、どの辺りでそれが可能になるか検討したい。

会長／先ほど、「旅する絵本カーニバル in 黒崎」の報告書をいただいたが、これはNPOの方たちの力を借りて実施している。こういった動いてくれそうなNPOがあれば

そちらに説明をするというのもアイデアだと思うが。

委員／小学校とか幼稚園、大人たちを対象に「絵本カーニバル」を開催してるが、そこに来られている方たちなど、団体ではないが、個人的に説明しながらこれを配ることは可能だと思う。

委員／今更だが、ポスターは作成するか。

事務局／今のところ予定はない。

委員／割とポスターは人の目に付くものなので、市民センターに貼ると効果があるのでははないか。

会長／可能ならば、ぜひ検討していただきたい。次の議題に入る。

今後5年間の単年度目標値の設定

会長／5年間の単年の目標値と平成28年度の目標値が設定されている。5年過ぎても100%達成ということであるため、それを1年ごとに割り、少しずつ高めていくという目標値になっている。それについて何か意見があれば、「それを少し上げるためにこういうこともできる」というアイデアでも。

例えば、施策1の2番目にある『ブックスタート』における絵本配布率を少し上げたい、これについてはこれまでの会議の中でもアイデアがいくつか挙がっている。例えば、「絵本配布率を上げるとしたらこんなことが考えられる」というようなご提案など。

事務局／「はじめての絵本事業」についてだが、今は「ブックスタート事業」という形で、出生後の方にハガキをお送りし、図書館等120数か所で配布している。今まで大体60%の配布率であった。今回「はじめての絵本」という形で、母子健康手帳を配布する際に、あわせて絵本を配布するとほぼ100%の方に渡せるため、配布方法の見直しを行い、100%を目指していく。ただ、今回、「ブックスタート事業」の配布率が60%台で、28年・29年当初にかけては並行して「ブックスタート事業」もあわせて行うので、配布部数はこういう状況になっている。最終的には、ほぼ皆さんにお配りしたい。

会長／今年度から配布方法の見直しをという方向性で少し上げたいということだった。効果が出ると良いと思う。他の案について、何か「こういうことをやろうとしている」というような施策の方からの計画等もお知らせいただきたい。

委員／4月23日の読書デーにちなんで、小学校はすべての学校でほぼ取組みがあるが、私の地域の中学校で、この度「ブックトークをしてください」という依頼が来て、それで実現できた。中学校でブックトークするというのは本当に私たちもやりたいと願っていたが、苦手な方もいらっしゃるということでなかなかできなかった。ブックトークの専門家が1つプランを作ってくださって、それをみんながかかわって説明するという、やり方としては自分のものになってないままでトークしたという方もいらっしゃるが、それでも中学でできたのは画期的なことだと思うので、こういうこともずっと継続していければ良い。

会長／ブックトークは、ゼロから作るのは大変だが、誰かが台本を作ったものがあって、それをまず見れば、もしかしたらできるかもというようなことで、必要があるかもしれない。

委員／今日、ちょうど中学校にブックトークに行ってきた。読み聞かせボランティアだけではなくて、本を紹介する、本と人をつなぐ、そういう橋渡しをすることも非

常に大事だと思う。どんなに学校図書館の中に素敵な本を準備しても、なかなかその本を手にとって読むところには至らないが、ちょっと紹介をすれば、子どもたちは実際読むようになるので、特に中学校などは、お話し会よりもブックトークをしていくべきではないか。私も指導もできるし、たくさんテーマでプランやいろんなものを持っている。今日は未来文庫という形で、紹介した本は全部貸して帰っている。そういうサービスもしている。いくらでも協力できるので、読み聞かせ・お話し会からもう1つ何かみんなが進んでいければ良い。

委員／読み聞かせボランティアバンクにブックトークのバンクをゆくゆくは取り入れられたら良いのではないかと。各図書館にいらっしゃる方々、図書館の方々も少しスキルアップして、図書館の方が自分たちから周りの小学校・中学校に投げかけていくような派遣ができれば良いのではないかと。あと、指導をする方のバンク、指導する家庭読書ボランティアを家庭教育学級の方に派遣するとか、そういうものをバラエティ豊かに図書館の方が持っている、また内容が充実したものになるのではないかと。

会長／施策の中には、ブックトークという形での目標値はないが、学校における読書活動の推進をするうえでブックトークというものには効果があるという委員からの意見もあり、それを準備・提供できるという委員の貴重なご意見もあったので、今後、プランの中に積極的に入れていくと良いのではないかと皆さんの意見だった。

委員／「ブックスタート」が母子手帳を渡すときに本を渡すことになったということだった。それは、確かに配布のパーセントは上がると思うが、今、保育所等で渡すときは必ず読み聞かせをして、お母さんたちにそれこそ人と本をつなぐということ、どうやって読んだらいいのかということも含めつつ伝えている。その部分はどうなるのか。例えば、ハガキはもう出されないのか。そうすると、そうやって保育園でお渡しするというのもなくなるので、ただ本を渡すだけになってしまえば、本来の「ブックスタート」の趣旨は失われてしまうのではないかと。確かに配布パーセントは上がるだろうが、心を込めて読んであげて、親と子の情緒のつながりの中から「本を読むことは楽しいこと」「嬉しいこと」ということを伝えていくのが本来の「ブックスタート」の目的であるはずだが、その辺はどうなるのか不安に思う。

事務局／今、「ブックスタート」の配布率が60%台というところがあって、約40%の方の関心が低い。その方々にも子どもの読書活動に関心を持っていただきたく、できるだけ皆さんに絵本をお渡ししたい。早い時期から読書に関心を持ってもらうために、絵本を渡すだけでなく、読み聞かせの周知も行う。出生前の早い時期から関心を持ってもらうことによって、実際に読書をしていただくことにつなげたい。それと、図書館の方でも出生前の読み聞かせをやっていきたい。今は、出生後の読み聞かせが多いが、出生前から読み聞かせを行い、より多くの人に関心を持っていただきたい。図書館でこういうことをやっているということや、親子ふれあいルームの中でも行っている読み聞かせについて、そういう機会を利用していただくよう皆さんに知っていただきたい。

委員／図書館で産まれる前から読み聞かせをされているところに来られる方は、意識の高い方だと思う。本を取りに来ないその約40%の方は、多分、意識がそこまでない方だと思う。その方たちにただ渡すということだけでなく、保育所や産後の検診のときにお渡しするのが一番良いのではないかと考えている。しかしもう保育

所等ではもうお渡しはしない形になるのか。

事務局／28年度・29年度に関しては「ブックスタート」と並行して実施するが、今後「はじめての絵本」の事業が始まるので、どういう形で渡すのが良いのか考えていきたい。今は出生後にお渡ししている。そして、今度は出生前という形でお渡しする。既にもう母子健康手帳をお持ちの方がいらっしゃるので、28年度は「ブックスタート」の中で絵本をお渡しし、「はじめての絵本」の中でもお渡しするような形で、事業としては並行して行う形になる。

委員／結局、母子手帳をお渡しするのは5か月ぐらいのため、産まれる前にお渡しするということになるが。

会長／委員の思いとしては、やはり渡すだけではなくて、本当に「読んであげたいな」という思いになっていただくような企画が必要ということだと思うが。

委員／「ブックスタート事業」というものが、元々、本を手渡す事業ではなくて、本を手渡すと同時に、親と子で温かい時間を作りましょうということも含んでいる。それを片側だけしかやらないと、それは「ブックスタート事業」にはならない。この「はじめての絵本事業」はどのような形で行われるのか。母子手帳を渡したときに、「あちらで説明しますので、そして説明を聞き、本をもらってください」という形ではないということか。

事務局／母子健康手帳を配布するときに、あわせて読み聞かせの大切さを伝えたり、あるいは絵本だけでなく、絵本のリスト等をお渡しして、図書館等様々な所で実施している読み聞かせの案内もあわせて行う事を考えている。

委員／親子の温かい時間を作るというところが「ブックスタート事業」の一番大きなポイントである。その条件がクリアされなければ、実は「ブックスタート」と名乗れない。いくつか条件があり、それをクリアしたものだけ「ブックスタート」と言って良いということだったと思う。そういう条件をクリアしてこの事業は進められるのか。

事務局／出生前の早い時期から関心を持ってもらうという形で、事業の名前としては「はじめての絵本」という形で実施しようと考えている。確かに、言われるように、「ブックスタート」は今まで出生後の方にお知らせしながらやってきたが、今回は、実際に出生前の早い時期から多くの方に読書に関心を持ってもらうため、「はじめての絵本事業」を実施したいと考えている。

委員／もしそうであれば、まだどこでもやってないやり方だと思う。そのため、どういう風にやれば結果がわかるのかわからないが、追跡調査をやって、本当に「ブックスタート」というやり方でやった場合と、この「はじめての絵本事業」ということでやった場合で、どれだけ子どもたちのところに本が届いているのかとかという事を確認していく必要があるのではないかと。例えば、3か月検診とか4・5か月検診とか、地域のお医者さんで受けられているので、半年ぐらいかもしれないが、何かの折、例えば小学校に入る時に、長いスパンになるが、『ブックスタート事業』で説明を受けた子どもが本好きになっているかとか、何か「図書館によく通ったか」等、『はじめての絵本事業』で本をもらって、それをどうしたか

ということが分からないと、本当に「ブックスタート事業」イコール「はじめての絵本事業」として認知できるのかどうかという点に不安がある。

委員／保護者たちの現場の声を紹介したい。読み聞かせのボランティア等をされている方たちは、すごく喜んで「ブックスタート」の絵本を受け取って。しかし、子ど

もの年齢が例えば年子だったり、いくつ違いとかだったら、「同じ本をもう一度もらって、とってももったいない気がした」とか、「どうしてせっかく絵本をいただけるのに選ばせてもらえないのか」とか、意識が高い方は高い方なりに、「もうちょっとこうだったらもっと嬉しかったのに」という声があった。

子どもさんが「僕の絵本」、「私の絵本」といっていただいた本を大事にしているとかいう心温まるお話も聞けた。それと同時に、ノーテレビ・ノーゲーム、読書の日の取組みのアンケートについて鋭い指摘もあった。取り組んでないことを前提としたアンケートである。『食事のときにテレビを消す』なんていうのはもう当たり前のことでずっとやっているのに、わざわざアンケートでそのことを聞かれて非常に不愉快だ」ということを言うお母さんもいらっしやった。「ものすごくその辺のことを考えて子育てをしている。まして、ノーメディア週間のときなどは、絵本とか読み聞かせを大事にしている。その自分のやっていることとかアイデアとかを逆にこのアンケートで発信していきたいぐらいなのに、常にやらないことを前提としたアンケートだ」など。これは大変もったいないことだと思う。アンケートの中に、例えば「お子さんは、『ブックスタート』のときにももらった絵本とどういふかわりですか」とか、「それをきっかけに読書好きになったと思えますか」とか、こういう機会を大切に、本当に意味のあるといふか、こちらが知りたいことをお母さん方の方から発信していただけるようなアンケート調査にしていくと、次につながるのではないか。

会長／『はじめての絵本事業』で配布する絵本の選択ができるとうい改善点1ついただいた点と、ノーゲーム・ノーテレビ・読書の日のアンケート調査に追加することができるかというアイデアをいただいた。

出生前に絵本を配布するとうい新しい企画をするにあたって、やはり親子の温かい時間を作るとういものゝ添えて体験していただくなど、ソフト面も考えつつ、実施したらどうかとういご意見だった。どうしても、パーセントだけ出ていると、配布した数だけとういイメージになりがちであるが、本当に必要性の実感を持っていただけるとうい出し方とういのを検討してほしいとうい意見だった。

委員／10年以上前に、この「ブックスタート事業」が始まる前にかかわった委員からの発言だった。パーセンテージ的には、10年後ぐらいでもう少し上がっているかと思っただ、思いのほか上がってなかったのがとても残念だった。ただ、当時は非常にパーセンテージが低かった。それで、良い意見も出なくて、自分は企画書まで出したが、その中で、「図書館が変わらなくてどうするのですか」とういような話なども出た。その時に、保育園の代表をされている方が「保育園でも配りましょう」と仰ってくださった。非常に困難な企画・会議だった。その中で出してくださったことから大きく良い方向に動き始めた。ただ、パーセンテージはもう少し上がっているべきだと思うので、やはり両方折れ合っとうい良いプランを出していくべきではないか。事務局の言われている配布率100%にしていく必要が絶対にあると思う。しかし、「ただ配れば良い」とうい訳ではないので、ずっと努力を保育園はしてきたと思う。保育園の持っているノウハウもあると思うので、折れ合っとうい、100%でなおかつ読み聞かせの大切さを、そして小学校になってもそのことが効果的になっとうい風にやっとういければと本当に思う。保育園の方々の意見を、絶対、大事にしてほしい。あのときの委員が声を上げなかつたら、非常に悲惨な会議になっとういと思う。

委員／パーセントが上がったというのは良いと思うが、「いらないわ」と言った方も、お話を聞かずにただ受け取るだけの方もどれぐらいあったのか。今後検討してほしい。

子ども図書館の整備について

会長／それでは3つ目の話題・議題「子ども図書館」の整備について。平成30年秋オープンに向けて、次回のこの会議では、配置－ゾーニング案や、どのような機能を持たせていくのか、そういうことについての案を提示してもらうことになっている。それに向けて、今回、この会でいろいろな案をいただきたい。例えば、学校の読書活動支援機能や文化振興など、そういう機能をいろいろ考えられると思う。

委員／29ページに「子ども向け専門図書館」という機能が最初に挙がっているが、子どもだけに特化すると考えているのか、子どもの読書とか、子どもの本の研究とか、そういう部分まで及ぶと考えているのかでまた少し機能が変わってくると思う。「子ども図書館」の中央館的な機能を持つのであれば、大人向けの、大人が子どもの読書とか子どもの本のことを勉強するための部分も必要なのではないか。

事務局／後者。子どもがただ本を読むだけ－もちろんそれも大事であるが－ではなくて、大人がどう研究していくか、研修していくか、学校とどう連携するか等についても、今、考えている。

会長／具体的には、子どもの本の研究書や、「子ども図書館」のあるべき姿とかに関する本など、そういったものも入ったものになるということか。

事務局／具体的にはこれからであるが、そういうものが必要だということになれば、当然そうなると思う。

委員／市立図書館による児童サービスの統括機能と学校図書館支援センター機能といったような機能がここに書かれているが、本来的には、例えば、学校図書館の司書の人たちの職場は1人職場である。そうすると、1人で仕事をしていると大変なので、やはり集まって情報交換をしてというような、そういう仕組みが必要だと思う。それをこの「子ども図書館」で担うのか。担うとするなら、どこかに少しそういう機能も入れてはどうか。ソフト面になると思う。学校関係者の研修というのは書いてあるが、学校司書の人たちは、「自分たちのところでこんなに苦労している」というような話を一緒にして、そして、お互いの資料を共有化というようなところで発展していくことを期待していると思う。それを学校図書館関係者だけでやる場合と市立図書館が絡んでやる場合、例えば旅費がない、学校から出られないので研修に来られないなど、具体的な話をいろいろ話を聞く。そこら辺の仕組みづくりで、市立図書館が声を掛ければ、連携・連絡機能みたいなものができるのではないか。この件についてどの辺りまで考えているか。

事務局／現在の学校図書館の職員の研修が年に2回ほどある。これは、学校を会場にして行ってはいるが、十分な旅費がまだ取れていないので、その辺の充実について、今後図書館の方と進めていきたい。

会長／今、委員からは研修プラス少し質の違うものとして、図書館職員のネットワークづくり、それから学校図書館と市立の図書館の司書の方たちの情報共有などの機能についてご希望があった。

事務局／子どもたちにとって、何と言っても学校図書館が一番身近な図書館だと思う。「子ども図書館」が学校図書館とどう連携していくのか、とても大きな大切なことだと思っている。今、委員が仰ったことも含めて、考えていくことは不可欠だと思っている。

会 長／他に何か「こんな機能は」という事があれば。

委 員／今、学校図書館のことが出たが、小学校・中学校・高校と学校図書館がある。主に小学校の方は割と充実したことは考えられると思うが、子ども向けの図書館ということで、中学生や高校生がライブラリーサポーター・子ども司書として参加する。そして、子どもたちが生き生きとそこで活動できるような図書館。子どもたちが、本好きな子が本好きな子へ、本好きな子が本を読まない子たちへ「こういうものがあるよ」と進める。今、実際子どもたちを見ていると、本当にソフトカバーのものなど良く読んでいる子がいるが、「お友達が面白いって言ったから」という、そういう軽い感じで子どもたちはどんどん本がつながっていくので、ライブラリーサポーターというような中学生・高校生の子たちがそこで活動できるような、そういう図書館があったら良い。そして、その子たちが通信などを発行するような、ホームページにもそれをアップできるような、そういう機能が充実したものになれば、良い図書館ができるのではないかと。実際、広島市の「子ども図書館」などでは、ライブラリーサポーターとして中学生や高校生がそこで生き生きとして活動しているので、とても参考になる。広島市の「子ども図書館」のホームページを一度、皆さんご覧いただきたい。

会 長／4番目の学校図書館の支援センター機能で、ライブラリーサポーターたちの拠点の機能を担ってはどうかという意見だった。

「さまざまな図書にまつわる活動が可能になるスペース、そういったものがあれば良い」というような意見が以前に出たと思うが。

事務局／ワークショップなど、イベントができるということか。

会 長／はい。何か、「イベントはいつでもここでどうぞ」という場所。

ちょっと話はずれるかもしれないが、これらの、例えば、先ほどのライブラリーサポーターの拠点にするというようなのは、ハード面だけではなくて、そういうことを仕掛けていたりとかする「人」がいると思うが、そちらの方はどうなっているか。

事務局／「人」の手当・配置についてはまだまだこれからなので、それこそご意見を伺いながら必要なことを考えていきたいと思っている。すべて可能かどうかかわからないが、必要なものを考えていきたい。

会 長／委員の方で何かご職場の立場から、「こういうのがあったら良い」というのがもしあれば。

委 員／特別支援学校の方から代表で来ている。特別支援学校にある図書というのは、割と音が出たりとか、非常に大きかったりとか、結構静かに読むタイプではない。おもちゃ的なところもある。そういった子ども、障がいのある子どもに限らず、幼児の方とか、気にせずに読めるようなスペースがあれば良い。プレイルーム的な。「必ず静かに読む」ということだけではないと思う。

会 長／確かに、以前の会議でも、「声を出して親子で読んでも構わない、そういったところがあると良い」というご意見があったように思う。

点字絵本や特別支援の子どもたち用の図書の充実とか、それはこの中央図書館ではなくても、そういった面でのフォローもあった方が良くないと個人的には思う。

委 員／点字の本など、障がい者福祉会館とか等福祉関係の方でも取り組んでいるものがあるので、そちらの方とも連携できればという気はする。

会 長／この会議の打ち合わせのときに、事務局の方から聞いたのだが、「視聴覚機器を利用した教材制作などの機能、これまではあったのを、今後、どうするか」という

ことについてはどうか。

事務局／視聴覚センターの機能のことだと思う。視聴覚センターの機能は残す予定。しかし、どのような場所でどのようにやっていくかについてはまだ決定していないので、機能自体は残ると思うが、「子ども図書館」と直接そのことは関係しない。ただ、場所の問題として出てくるかもしれない。

会 長／他にアイデアがあれば。

委 員／1つ、シビックプライドを醸成する図書館ということで、先月から小学校や中学校や所属する市民センターの方にも、北九州市の文学館の方からゆかりの作家たちの本がたくさん届いて、拝見させていただいた。これを何か上手く活用できないか。ここに、「地区館による地域人材の育成の支援」と書いてあり、市民センターで月に1回行っている、小学生向けの「生き生き子ども講座」の中で、地域の人材、地域の方にご協力いただいて、子どもの講座を運営している。

本当に地域は宝の宝庫で、例えば若松であれば火野葦平さんにゆかりがあったり、詳しい方がたくさんいらっしゃる。こういう方々はボランティアのネットワークの中に入りたかど決してそうではなくて、「自分がすごく好きな文学だけを誰か話を聞いてくれたら嬉しい」というぐらいだが、大変専門的である。市民センターの職員を研修するというよりは、市民センターを拠点にこういう方々の情報を集めて、この「子ども図書館」の方にその情報を提供できるのではないか。それを利用するような仕組みができたらいと思う。市民センターだとその方の特性というか性格みたいなものがわかるので、そういう情報も含めて、センターと「子ども図書館」が連携を取っていけたらいいと思う。

会 長／このシビックプライドを醸成するという事は、今回のプランの目玉的なところもあるので、地域の埋もれた人材情報を収集して組織化するというような機能も持たせてはという意見だった。

委 員／人材プラス資料。資料を山ほど持っていて、2階がもう床が抜けそうになっている方とかもいる。そういう方で話すのが異常に苦手っていう方もいらっしゃる。「すごい人がいるから」といって市民センターで呼んで話していただいたら、非常にわかりにくい話をされて、ちょっと難しかったりしている。人材だけでなく資料の宝庫でもあるので、市民センターを通して結び付けたり、新しい資料や詳しい資料を引き出してもらえればと思う。

会 長／人材及びその資料のありどころ、情報についての収集機能ということだった。

委 員／確かに、昔の話とか歴史を知っている方はたくさんいらっしゃるし、資料を溜め込んでいる方もいらっしゃる。昨年度、小学校の140周年だったので、歴史資料を全部調べた。資料収集・提供するのは良いとしても、今の子どもたちは読めない。どういう形に変えて子どもたちに提供できるか。ただ、昨年度の記念誌に関しては、地域の人と連携して、今の言葉に変えて、「こういう風にわかりやすいように」という風には伝えたいけども、今、資料をポンと渡しても、絶対読めない。細かいところを調べるのにいろいろ読んだりするが、どういう風に収集して伝えるのか。

委 員／寿山小学校は紙芝居という形にしている。

委 員／勉強の仕方、伝え方に関して。人もそうだが、やはり資料として、現代口語訳に変えて残す必要を感じた。歴史資料としてもすごく朽ちている。保管状況が良くなかったり。それは学校単位であったり市民センターであったり、中ではもう捨てられている状態だった。いかにそれを保存するか、子どもたちに伝えるかとい

うところをどうするか。

事務局／あくまでも「子ども図書館」としてどういう風に資料を収集し、どういう風に残し、子どもたちに伝えていってシビックプライドの醸成をするかというところが視点である。人も資料も含めて地域は宝の山だと思うが、方法論も含めてそれを「子ども図書館」でやるのが良いのか、違う市の施設が良いのかという区分けもいると思う。具体的な案はこれからだが、あくまでも「子ども図書館」でというところをメインにやっていきたい。

会 長／目的が「子どものための図書館」なので、そこがぶれないように、資料収集の際の選別の判断、または活用というところまで視野に入れて考える。「『子どもに伝えていく』という意識を持って収集なりをするという観点が大事ではないかということだった。

委 員／「北九州市ふるさとかるた」というものがある。その中の説明が「子ども図書館」で編纂されていたらとても良いのではないか。そのかるたとかを保育園でも「しよう」となったときに、その背景を保育士が知らなかったりする。また、子どもたちに「郷土の歴史でこういう人がいた」というようなお話とか、それから、小倉城に行ったら灯台があるが、「このときはこんなのを作った」というようなお話をしていくときに、何か簡単な冊子とかが揃っていると良い。何かそれが普及していくと良いと思う。

会 長／具体的に収集する資料に関するアイデアを挙げてもらった。「子ども図書館」について大きく3つの柱があり、それぞれある程度、いくつかの点で具体的な提案がなされた。そういった案を今後生かしていければと思う。

事務局／長時間にわたり議論をいただきまして、ありがとうございました。次回の開催は7月を予定している。

以上で、「平成28年度第1回北九州市子ども読書活動推進会議」を終わりたい。
後日、本日の議事録をまとめ、市のホームページで公開をする。